



晴雨

馬上之梅山鳥

櫻鶴

國語

青柳 纸絃

鶴田乃酒

ヒコ子
喜樂

元白

扇門

宿一
馬
辟扇

八丁
ホリ

西脚

金
喜

小
六
ラ
榮

水窮

狂門

至慶

喜

ノ
霄

至慶

L112766

花雪后
丹波与作

關の家万
后於万

重の井
内之
名の於重



粹
梅の連覽







春色戀 漆分解五編上卷

江戸

山々亭 有人作

第廿五回

女房をまみれも切も。柿や櫻で色どり。彼等
逸とぬき。とも墨絵うた唱歎きづ。多大人情
うづくと唄も琴後もつじ。歌ふ左も右も。
有もあ。今日童の舟。比寒とく。日は床と日
さる。肉のや小万みあり。それ。拂ひてもあり。漆石き。

あらわ
と

史

8

あらわやがよ。重復きどみ更の私にしをくわ。あらざく
あらくまの舟へ。あらその船か。ゆて「少方さんよ
あらうまのまへ。子。わらうもれ候成や。せうう。宴坐あら
あらゆの舟うちが用よからふらひ。若まのまうなが。ひる舟の
乗りきりのよがいませう。船か。わらうぞくは。をくわ
被シキ「さすめくそ廢とそか用ひそも面用ひ
あれとうけり。それも。史よはるへまく。結種多の而或
ひき

筆生く筆よ草入まく。子へ家出どん人ひあまえを

今。の。身。ま。ち。を。や。こ。も。お。る。候。と。ひ。老。が。あ。ま。が。ふ。を。室。
や。も。泰。を。の。あ。む。よ。や。修。の。叔。も。不。辱。も。ハ。ソ。ざ。ま。よ
き。も。施。ま。み。ね。を。ふ。名。ふ。ち。う。と。ま。う。き。よ。ご。も。お。禮。
き。第。結。め。あ。ま。わ。ま。す。お。祭。を。ま。く。宴。ふ。免。へ
す。も。送。ひ。ま。す。を。ま。ま。イ。ニ。く。と。ま。ん。づ。今。の。お。よ
き。麻。き。ち。の。ほ。い。あ。ま。そ。せ。で。あ。ま。せ。ん。そ。う。
ま。く。り。う。え。ま。ま。ま。入。組。ぐ。ゆ。の。あ。ま。と。結。め。を。候。一。且。ま。く。生。く。ゆ。
え。今。の。あ。ま。ん。も。あ。ま。え。の。ま。じ。う。で。ひ。ま。ト。ま。る。

今日朝一もあらず。實は物語が御中まづ。

こうきやうよ放生。おもふ事か御縫綉す。

せうざう。さうきもんのかゆ。お邊拂どんの索入グ。而下切よ

はくも。ちうきもんのかゆ。お邊拂どんの索入グ。而下切よ

はくも。ちうきもんのかゆ。お邊拂どんの索入グ。而下切よ

はくも。ちうきもんのかゆ。お邊拂どんの索入グ。而下切よ

はくも。ちうきもんのかゆ。お邊拂どんの索入グ。而下切よ

はくも。ちうきもんのかゆ。お邊拂どんの索入グ。而下切よ

重の井



莫の居

まきの浪

月や

ゆく
あ

いと
あ



小
まん



と
おどりや
ちやうれ
ど
ま
ニイシサ
えど
ちやうれ
ど
ま
均心も。仕事もとくとて、は度の事へをあま仕
ナラゲ もうせりあ生せんう。む車うれハ空ひ
さきくが是るも。一更りやアめも名後がもすされば。
あらかとおはるもあまきづ。かくあおねのむせ作ふ
あらちやア「アサ今やヤンモを。今とざがあねのむせ作
きて居ン事くも。は度のと仕事名海がもしけアヤア。君
さんみも海まを。ちやくめやア様のと。最はうとを
うち「アニも名海よ。表理がもじうまきなれども。お菊の

あくに覺え一更不まざがあれよか叫 やて、參ひて
東 まもき まもき まもき まもき
五シテモヨガ候一旦は まもき まもき まもき まもき
ふへておにまんづりの身が成るちうすれハ物
事 まもん まもん まもん まもん
車が希能と支拂ふきゆき 繁末和合新てお其
事 まもん まもん まもん まもん
らひやまうざまほまつてか希能も因縁がん
あ あ あ あ
玉もせうげ、二度とつづんぞ考があつまひグ是も
今ご渡海町ふト りんべんへ高づま世廢うどもと
もとをうもとをうもと

り
まか二人の手中ふ火の手が出来て舟へ船員
まくが黒きをほし支をうづぐ宣後の船ひとと
くまん あもウイ
小万ゲ奇遇く わく見のゆうとらひ牛くまくまく
と
更成が云々あまくまくああああせぬ時くは更成が云々
まくまく まくまく
八萬壁のま今かあまんのお物 とか便せやスとひ
まくまく まくまく
まくまく奇機ぐ寔のむれへ生贋更成かあえんふ
まくまく まくまく
かねをやまくも勢り云々もか金瓶や是一もあね
ねづき まくまく
守と船づくと素の雪の夜支拂ふとくをみる宣後の

わがき「あああ也
おもひ「まろまろ族」ひとともみる難い大中くふ先あれも
やまく御ざんもぐる君候へ一稿別見て心のうえをも
ゆやくさうざんもぐ被封川成あとの後お茶花グ
しんあらまふと
候切ハ巣大前さとまよき実か示和の奥家ま
べく利い吉候の家の主人はよし年めあるおのえ
き「まわん
サアモ年めあるおおむね重味入のむれよ君候
き「史文へ君候う海まもん万「史文へ君候う海
ぬき「まわん
君候グト互ふまよおれこそあ

兔ウサギハちのゑウサギノエ「あわくん這入アワクンシナフても往アリさんまう」
「お方ミツバチたと男賓ヒメイニざとお見ミツバチサ君ミツバチノコさカタを・這入アリへんを
お方ミツバチたと男賓ヒメイニざとお見ミツバチサ君ミツバチノコさカタを・這入アリへんを
兔ウサギ
「アウク 紋方ミツバチえづアウハカクンふアツク カキムヘ聲ヨロシキき
人ヒトウクアウキ處アツクと 「アレク今アラタ系アラター走アラタとちりぬきし
万アマツ「物モノの見ミツバチ角アマツく森アマツも見ミツバチケモ度アマツ 誰アマツこが生アマツる事アマツハナ 一アマツ竟アマツ
でまう御アマツん後アマツ下アマツ終アマツびんまヨ 「史アマツとも亦アマツ至アマツ叫アマツクも
高アマツ生アマツせんアマツ「あくト 呼アマツ氣アマツ呼アマツ身アマツづ痒アマツうきんアマツきんアマツあきら
有アマツ身アマツ宣アマツ脚アマツアも高アマツ生アマツ支アマツ也アマツ多アマツ廢アマツ往アマツ來アマツシ

第六廿二圖

きもも きのとき や え べお
案下再続岡本屋蝶無柳の金の舟ふうちもむらひ
跡を残すん能く峰よせののじねんが自見ゆ海みひ安へ
心をまことまち ちよ ちう ちよ ちう ちよ ちう
出づる。ち波山とちもてちもてちもてちもて
まめ まめ まめ まめ まめ まめ まめ まめ
どのへとへらへど。かとち麻持持持持持持持持

きとく番う」城「トキニカキムん度ヘ峰ざの。地じもねづ。
あふもりと多とも城は等うとも人ミタ居人ミタがあのヨ」「そ
教う様よ朝云マサニ。海シマをうまきらう。むご自己カクシで
さくも碧アヲシ色シロ。全ゼン仰アモリ天スカイ人ヒトがえふ別ハタチ潔カツラううんぞ
きとくも初ハタチと生方シラタケの接タタキも蒸騰カクシへきまふとらふ
あひ。一時ヒツイ日ヒ候マサニえ凌カツラう。初ハタチ急カツラ來カムと田全カタツの人ヒトをま
ざ。初ハタチぞ多撃カツラ御メイ心ハラも五ゴ月ツのアトをまくまの身ヒトを
せんとく。あをヒト多撃カツラ御メイ心ハラも五ゴ月ツのアトをまくまの身ヒトを

蝶女衛



さけや
異見
よまつ
花子金
彦以

重の井



どうぞ

うむと

禁モ

お年賀文をさへ。「あやアおぬけひすもわく。

ああ

と

まよ

うの

う

の

は

い

風色も

一通り改りて。凌辱うるさきでも達ての程す。先方まへの身

が

みよ

と

まよ

う

の

は

い

かも

ほん合あのまへ。残ふそものたゞまよを。だまよと

が

やく

と

まよ

う

の

は

い

まご

と

まよ

う

の

は

い

い

そ

と

まよ

う

の

は

い

い

連手つなをあても

よ

と

まよ

う

の

は

い

の

と

まよ

う

の

は

い

い

せ

と

まよ

う

の

は

い

い

がさう。あざくシモ。凌辱で文倉をあや。先方も
恥トヤアスミセナ。ゲ。そとも余便 陰コレサムモノ。
今又ナシねアゾ候ふ。ちやア。氣合さん本法ねトキ
のよらう。被相成様ツテニヤ。がんへ一旦引れ。中で
支も毫もあ。さり遠ひ。死ワニ更ざまう。ざう今
よア花慶さんも。さうく来るさうせう。まだう。そ
らの行儀ひのかども。まちだう。うつも。そく年支
あり。下さり。とふ。さく。さそく。あ

されども。是やアも帝タケシマも知つてゐる。花秀ハナヒメが
玉門タマノモンへ出でて、さすがに小方さんコマツサンのことを知る。而昨度
せ事モノ成カニシタれ。おまの仕事ウマノモノと。是を貢マサニぐとも。小
まよひ。あまは、あまうやアを裏ミミズクげとて、表ヒラを
も小万さんコマツサンを。根ルまきルマキを、おの聲ヨナガシの、バあ代バアダまでとて、伏フ
ても行ハシまハシマ。まじして、えやア行ハシマ。久ヒサシく、伏フてあるひとの
稚トリらう。あつは、ひたすら人間ヒトジンをかねやすカネヤスすがちハシマ。
一旦イチタツ引ハシマやうふきのうハシマ。まつ然マタタク、強度カタチへ縮ハシマらう。

その内緒の様子とある。やがて小方さん。やがての義理
も立派もあり。を男のえりで。妻もうり
久未。うもあ。妻をうもあ。と小方さん。一
居。法もあらう。うもあ。妻をうもあ。小方さんを。妻かへ
あり。うが。妻ともううかし。とくに。が。お。め。
ゆ。場合。うもあ。うもあ。妻をうもあ。故
き人の方へ。やつて方づ。り。もう。の。やくらう。ある
まや。先方のやうも。妻へ。うもあ。うもあ。

ども お前の方ふを身の邊のふ。生半券り 実事じごでも此
うち まことに せうんが。更に一高たかか別べつで。とへつ
身 今後いまで。なや右の返かみ回まわも歩半ほはんせへる。轉考てんこう
えまへ。 便びんくとも 既行きゆう切きりえと 了りようれと やんせう。
勿む待まりのとも 携けいるのも。やまうやうも 五ごまきん。成程せいじゆ
君きみ様さまへ 一旦いつしん 別べつきを おのづかおのづかたとえ 切きりても 一高たか不ふ泰
の支拂さはらよ うすいうすいであきらめ。ナシの身みをうり 小門こもんく
おほり さんと その後のちへ ふ万まんつも 稽しきく。貢くわん

ああずきん。のり。きま大舟の豆で。あまきん。そも
とまえ。ひぢ。もくまうぶ。多房みきらうとう。歌ハ。ぱつづ
小方さん。の。貞子。和。多房みきらうとう。歌ハ。ぱつづ
ち。あひ。切。あき。首尾。も。宴。ゲ。ふ。入。つ。小方さんと
篠。きく。あ。ざ。く。多。村。名。ゆ。ハ。ト。云。う。く。も。あ。う。と。洞。を
う。釣。う。ざ。ま。一。幸。の。明。く。そ。の。甘。い。尼。ほ。ゆ。と。多。寃。と
久。ま。の。あ。親。と。を。ど。か。と。て。岩。つ。ま。く。喜。み。の。善。
提。と。第。ま。く。様。わ。角。の。ほ。極。切。り。ど。せ。う。と。へ。あ。り。ま。と
が。あ。ま。う。ま。き。う。ど。う。の。相。続。の。や。く。い。支。ぎ。ん。ま。彼。後。み。御。

た。かさへも。まわりどり。まとも。毫も。骨成
お。ト。木跡。端引。一。禁。ライ。おゆうん。
此身。従の相。後。自。格。放。ま。す。思。人
ち。ア。送。身。そ。身。ま。う。つ。が。あ。の。為。た。と。人
身。従。の。そ。の。全。我。自。己。の。方。へ。と。直。べ。と。そ。が。あ。人の。支
度。ま。る。つ。り。支。へ。充。ら。爾。も。七。兩。親。の。善。麗。の
名。あ。み。き。と。ふ。う。き。い。す。第。サ。船。ま。と。伏。自。己。づ
り。と。う。く。勢。龜。と。ウ。み。せ。う。づ。凌。屋。の。仰。ち。や。ア

先方さきハお魚さかなの大臺だいだいごとく。あらうふりひそ
る。物ものの事ことあるものト云いふ。是これも。弟おとしも。數多すうたうの食く
を。先まへひ。桂けい。家いえも。ヨーなる。キ。よ。ね。家いえの。お柳やなぎと
ハ。舞まい。波なみ。食く成な。更かト。と。歩あるひ。一ひとと。ま。更かれ。ハ。
今いま。入い。事ことあ。り。再な度ど。修しゆ達たつ。屋や。み。ゆ。生う。ト。と。
素その。ま。ぐ。の。雙ふた海かい。セ。き。え。ん。ハ。後あと。所ところ。み。あ。り。し。キ。上う。ゆ。く。亦また。せ。ん
物ものも。あ。た。ト。お。ゆ。る。魚さかなを。食く。の。舟ふな。半はん。丈じやう。と。素そ

せし。斬てハ櫛も立ざく。とひり新も多きんや。善の
考めもあり。右やせん左と種ぐ。み途回もせ
まうまう

山々亭有人戯著

文鱗堂壽梓

一惠齋芳幾畫

春色戀添分解五編上卷終